

「明主様と聖地に直結する会」見解書面掲載について

世界救世教は、大経綸18号でお知らせしたように、「明主様と聖地に直結する会」の主体性ある活動を支援し、教義に反した主之光教団にあってなお明主様のみ教えを正しく受け止め、明主様とともに生きることを願われる信徒への呼びかけを、連携しながら取り組んでいます。

そうした中、令和2年9月の主之光教団祭典における岡田真明氏の挨拶に対して、「明主様と聖地に直結する会」が見解書面をまとめ、心ある名誉職・専従者、信徒に対して呼びかけを行っています。

世界救世教としても、「明主様と聖地に直結する会」の見解内容を支持し、協働して知らせていくために、同書面を世界救世教のホームページ・「信徒のページ」に掲載することとしましたので、ご理解いただきたいと思います。

令和2年10月23日

名誉職・専従者 各位

明主様と聖地に直結する会

9月1日祭典における岡田真明氏の挨拶について

私どもは先に、7月1日祭典時の挨拶で、岡田真明氏が、明主様と、明主様のみ教えを否定したことは看過できないとして、幾つかの点を取り上げ、皆様にお伝えしました。

そして今回、「グローリー」10月号に掲載された真明氏の挨拶も、前回同様に、み教えからかけ離れた内容であることを、具体的に指摘するとともに、是非とも皆様のご理解をいただきたく、本書面をしたためました。

1. 総じて

岡田真明氏の「教導」には、大きな特徴が見られます。

それは、真明氏自身の個性や思想というよりも、あくまでも岡田陽一氏の補佐として、陽一氏を援護するために、本教信徒を明主様から切り離し、何としても、明主様のみ教えとは全く違う「ミチナリ信仰」に導こうとする、強い意思が働いているということです。

それはまさに、ミチナリの教えをあたかも明主様のみ教えであるかのように説き、全く異質な思想に強引に導こうとする手法です。

その論理的組み立てを、み教えに照らして冷静に見つめれば、明らかな矛盾が読み取れるはずですが、多くの人達はそれに気づかず、また、気づいていても、やむを得ない事情で発言できず、いつの間にか、明主様信仰と違う方向に導かれています。

そこには、明主様のお血筋にある「教主」たる御方が間違はずがない、という先入観が働いています。

残念ながら、陽一氏と真明氏が巧妙な論理と口調で語るミチナリの教えに引き込まれ、事情がよく分からないまま、お苦しみになっている、存知の如く、それが多くの主之光教団信徒の実態なのではないでしょうか。

2. 救いの三本柱について

真明氏は、明主様の説かれた「救いの三本柱」を取り上げ、明主様が浄霊、自然農法、芸術による救いを示された願い、目的は何かと問いかけながらも、結局のところ、み教えから逸脱した「自論」を展開しています。

浄霊に関して言えば、真明氏は、浄霊の目的は「あくまでも神様がいらっしゃること

を証し立てる」ため、と説いています。

これは間違いではないものの、そこには、み教えの「浄霊とは幸福を生む方法」「霊の曇りの解消法としての浄霊」「病貧争の解決」「来るべき審判を無事に切り抜け得る資格者を作る」等々、最も重要な「浄霊による救い」への言及がありません。

更に、自然農法の目的は、「神様のご意思によって作物ができる」ことを知って欲しいため、と説いています。

しかしながら、明主様が創成された自然農法は、「土の偉力」を発揮させる農法によって、霊気の充実した食物を提供し、活力ある「健康人間」をつくることにあります。芸術の目的に至っては、明主様が「私たちの中に天国がある」ことを教えてくださるため、と説いていますが、このようなみ教えはありません。

明主様は、芸術とは「真善美の中の美であり最も重要」なものであり、「美による人心の教化」「芸術を通して人間の獣性を抜き品性を高めること」だと説かれています。

これら三点を総括的にいえば、陽一氏、真明氏の目的は只一点、人間自らの内に「天国」があることを分からせることにあります。

この「内なる天国」とは如何なるものか、真明氏は、全くその説明をしておりません。このことについて、皆様は、どのようにお考えでしょうか。

それでは、明主様はなぜ「救いの三本柱」を提唱され、具体的ありようを示されたのでしょうか、ご一緒に考えてみたいと思います。

明主様は、永遠のいのちを生きる存在である人間、即ち、霊と体で構成されるという「人間観」、そして「自然観」に基づき、霊から体、体から霊へと、まさに霊体一致した人間の「真の救い」のために、かけがえのない手段方法として、「救いの三本柱」を示されているのです。

真明氏は何よりも、み教えに基づき説くべきであるに関わらず、なぜ、陽一氏の言葉のおうむ返しをするのでしょうか。

それは、陽一氏と真明氏の思想の根底に、ミチナリ信仰があるからです。

こうした陽一氏、真明氏に導かれた主之光教団（自称・世界メシア教）は、いまや、明主様のみ教えからかけ離れた、全く別の宗教団体に変質してしまいました。

皆様は既に、そうした事実を十分に認識されていることと思います。

どうか、皆様本来の信仰を表され、明主様に真向かう道を「共々」に歩もうではありませんか。

3. 「浄霊は二の問題」について

真明氏は、明主様関連の記録の中から自分に都合の良い箇所を抽出し、それをあたか

も、明主様のみ教えであるかのように説いています。

専従者、信徒はそのことに、それなりの安心感を覚え、知らず知らず、異質な考え方に染められてしまっているのが偽らざる実態であり、その代表的なものが「浄霊は二の問題」「これから想念の世界」です。

真明氏が述べているのは、明主様ご昇天後、側近奉仕者による座談会の様子が、当時の機関誌に掲載された記事の引用であり、しかも、この話には後日談があり、当の本人の樋口ヒメ氏は次のように語っています。

「皆でお念じし、阿部先生に御浄霊戴いて、その結果今朝は何事もなかったように、寧ろ前より綺麗になりましたと申し上げた処『これが唯一の見本だよ』と仰言っていました。本当に有り難い事ですわね」

明主様は確かに「想念」について説かれています、この記事は、どこまでも「浄霊の重要性」を諭されていることを示すものです。

この「浄霊は二の問題」に関し、真明氏は本年2月4日の立春祭と称する行事の中で、次のように述べています。

「教主様がキリスト教のことを学ばれて、『聖書』も学ばれて、そしてまた浄霊についても、私たちが掲げているこの手だけが、浄霊の手ではないじゃないかと。神様の手が私たちの中にあるじゃないかと。それが本当の浄霊の手じゃないんですかと」

「私たちがどんな思いを持ったとしても、神様は、ご自分の光によってそれを包んで迎え入れてくださっている。これが本当の浄霊なんだと教主様はおっしゃる」

更に今回、「新時代へ」と題するメッセージNo.2の中で、次のように述べています。

「明主様は、『御浄霊は二の問題』だとおっしゃった。教主様は、この御言葉を遺された明主様の真意は、これからは、手を掲げるご浄霊は二の問題である、ということだったのでないか、とお説きくださっております」

真明氏の一連の発言によれば、私たちが掲げている手だけが浄霊の手ではない、本当の浄霊の手は、私たちの中にある「神様の手」ということになります。

そこには、明主様が幾多のご苦難を経ながらも、最終的に「救いの根本経綸」として創成された「手をかざす浄霊」を否定する、とんでもない考えがあります。

布教現場で、このことを忠実に受けとめ、実践していることを示すのが、今回の「グローリー」に掲載されたパウロ・サントス氏の次の一文です。

「アメリカの私たちは、もはや浄霊を頼みとすることはやめにしたのです。私たちにとって、手を掲げる浄霊の実践は、もはや大切なものではありません」

要するに、陽一氏や真明氏にとって、「手をかざす浄霊」はもはや不要であり、その段階は過ぎた、と説いているのと同じことなのです。

4. 聖地について

今回、真明氏は、「永遠に冬も夜もない天国はどの天国ですか？」と問いかけつつ、その天国は「私たちの中にある天国」のことであると語っています。

ところが、この「私たちの中にある天国」については、何の説明もなく、それはまさに、得たいの知れない「天国」であるということです。

聖地について、明主様は「聖地の土を踏めば良い」「此処に来れば、霊界が光ってます」とみ教えくださるとともに、御自ら建設に心血を注がれた聖地は地上天国のひな型であり、「真善美の世界」が世界大に拡大していくことを説かれています。

このように、陽一氏、真明氏の「教導」には、聖地に込められた明主様のみ心とは全く関係のない世界に導こうとしている、まさに明主様否定の思想があります。

だからこそ、陽一氏から「教団がお金に困れば、聖地を売ればいいでしょう。いずれ売却ですね」といった発言まで飛び出してしまうことになるのです。

地上天国のひな型であり、全信徒の魂の拠り所である聖地を、なぜ信徒から引き離そうとするのでしょうか、明主様のご悲願である「地上天国の建設」を、なぜ否定するのでしょうか。

このことを、お互いに、明主様に果たすべき責任において、真剣に考えなければならぬ時ではないでしょうか。

5. 「第二紀元の誕生」「第二段階の創造」について

真明氏は、明主様のお歌「時は今紀元末なり新しき紀元に肇まる地上天国」を取り上げつつ、その時は今であり、それが、明主様の「第二紀元の誕生」、岡田陽一氏の「第二段階の創造」であると述べています。

しかしながら、陽一氏のいう「第二段階の創造」はみ教えに全くありませんし、これは明らかに、ミチナリの「聖会での説教」で取り上げられていることなのです。

その一方、明主様の「第二紀元の誕生」は、ご論文「浄霊は科学療法なり」（昭和29年2月10日）の次の一節に出てきます。

「私の宣言する病貧争絶滅もその基本的条件である。そのまた基本が病気の解消であるから、神はこの鍵を私に与え給うたので、私は現在病の解決を主眼としているのである。以上によってみても、この大経綸たるや破天荒的大偉業であって、この結果文明は革命され、第二紀元の誕生となるのは勿論である」

要するに、真明氏は、陽一氏のミチナリを根底とした独自の「第二段階の創造」という言葉に似たような「第二世紀の誕生」だけを、このみ教えから抽出、引用し、明主様を利用しているに過ぎないのです。

そこまでして、陽一氏の発言を正当化させたいのでしょうか。

明主様を信じ、今日まで純粋に信仰を捧げてこられた信徒の皆様の将来を案じているのは、皆様も私たちも同じではないでしょうか。

多くの信徒の皆様が、既に、ご参拝や信仰そのものから離れられている事実は、私たち以上にご存知と思います。

私たちが声をあげないかぎり、陽一氏や真明氏の話しが明主様の本当のみ心であると、信徒の皆様は思い込み、ますます、それに従う信徒と脱会する信徒が多く発生することになります。

ここまで幾つかの真明氏発言を取り上げてきましたが、明確に言えることは、真明氏の考えは、陽一氏の補佐として、陽一氏を援護するために、み教えを学び実践してきた過去の歩み、そして現実的な救いの活動を批判し、結果として、明主様信仰の本筋を否定する、とんでもない思想であるということです。

それだけに、私たちは、自分自身を過少評価してはならないと思います。

お互いの信徒それぞれは、何がしかの影響力をもっております。

そのことを真正面から見つめ、明主様から与えられた影響力と責任、そして今日まで赦されたご神徳を、改めて意識しなければならないのではないのでしょうか。

この機会に、明主様のみ教え、特に包括法人で発刊したみ教え集「世界救世教とは」を学び合い、そこで得られたお互いの「気づき」を、共々に語り合えることを、心より願っています。

尚、このみ教え集をご希望の方は、どうぞご遠慮なく、お申し出ください。

以 上